

## 面白さことも無さ世を

## 生き抜く発想

ジャーナリスト 海部 隆太郎

道路を挟んだわが家の前に大規模な保育園がある。ここで毎朝のように繰り広げられるのが、「行きたくない」と叫び地面に伏して抵抗する子どもと、会社に遅刻してはならないとわが子を抱き上げる母親とのバトル。ほほ笑ましく思うが、朝刊に目を通してしている時間帯に玄関前で泣き叫ばれ、しかも次々に同じような親子が登場してくる時は、さすがに閉口する。

親子の闘いでは、父親ががちりと子を羽交い絞めにして抱え、その後ろから荷物を持ち歩む母親とのナイス連携も見ることができ、多様な親子の姿にかつての自分を見る思いがある。だが、早朝の大音響は連日続く。

これを迷惑とは思わない。子育て

に奮闘する親子に拍手を送りたい気持ちだ。子どもの泣き声には慣れたし、新聞も普通に読むことができる。あの親子のように「今日も頑張るぞ」と元気をもらえるような気がする。

逆にうるさいと思えば、不機嫌な1日で終始してしまっただろう。何気ない日常の出来事ではあるが、ちよつとした心の持ち方で人生が大きく変わる、と考えてしまった。というか、ようやく気が付いたのかもしれない。

## 「心なりけり」を経営・人生哲学に

長年にわたり経済ニュースを追う日々を送り、多くの経営者との交流があった。忘れられないトップたちとその考え方に共感し、自分の生き方に取り入れようと思ったことは

少なくない。その中でも商社の副社長やIT企業社長などを歴任したS氏の話は今でも鮮明に記憶している。

同氏がメキシコ赴任中に無実の罪で囚われ、拘留所では死を覚悟する場面もあったという。鉄格子の中で多くの知人から励ましの言葉をもたらしたが、現状を克服するだけの力強い言葉はなかったという。

悶々とした時間が過ぎるが、そこで出合ったのが高杉晋作の辞世の句。「おもしろきこともなき世をおもしろく」で、勤王女流歌人が下の句として「すみなすものは心なりけり」と詠んだ。

この句は多様な解釈ができるのだろうがS氏は、どのような厳しい状況に陥ろうとも、現状を受け入れ、決して腐らず、諦めず前を向いて進もうという気持ちを持ってたと話してくれた。現状に甘んじるだけ、などという後ろ向きな考えではない。厳しくない経済状況などはない。バブルの絶好調時代にも思うように

経営できなかつた企業はあるはず。別のある企業トップからは、「事業をやれば必ず壁にぶつかる。そこからが勝負だと思えるかどうか。そこからが経営を左右する」と言っていた。厳しい場を何度も乗り越えてきた人だから言える言葉だと感銘を受けた思い出がある。

企業経営も人生もすべて「心なりけり」ではないだろうか。経営においては、困難な局面で冷静に判断し対応策を講じる知恵が湧き、人生においては心の広さをもたらしストレスが蓄積しにくい状況を作られる。すべて当たり前のことだと叱られそうだが、忘れてしまっている人が多いような気がしてならない。

## 【筆者紹介】

海部隆太郎

(かいべ・りゅうたろう)

法政大学卒。全国紙記者、IT企業を経てフリー。中小企業を中心に幅広い課題を取材・執筆活動を展開する。